

夏肥施用による温州ミカンの増収安定生産

淡路地域の温州ミカン経営では、もぎ取り、オーナー制、直売といった消費者と対面した販売方法が広がっており、安定的な果実の供給が求められている。そこで夏肥施用による隔年結果軽減効果について調査したところ、5～6月に夏肥を施用することで収量が増加することが分かった。

内容

温州ミカン栽培における夏肥の施用については、窒素成分の遅効きによる着色不良、浮皮の発生増加といった品質低下につながることもあり、一般的には施用しないことが多い。一方で、根の活性が高く肥料の吸収率が高い5～6月に夏肥を施用することで、成木では樹勢維持や隔年結果軽減に効果があるといわれている。そこで、近年の気候変動等の影響で隔年結果が強く表れている淡路地域での夏肥の施用効果について検討を行った。

試験には淡路農技内に植栽されている「興津早生」（2011年時点で32年生）を供試した。処理区は春肥と秋肥のみ施用する「慣行区」、春肥と秋肥を減らし夏肥として5月下旬に窒素成分で8kg/10aを施用する「5月施肥区」、同じく6月

下旬に施用する「6月施肥区」を設定し、いずれの区も窒素成分で年間20kg/10aとなるように施用した（表1）。

収量は「5月施肥区」で増加し、隔年結果はしなかった（図）。着色期、浮皮、糖度は試験区による差はみられなかった。一方で酸含量は「6月施肥区」でやや高かったが、一般的に温州ミカンにおける酸含量の出荷目安は1%以下であるため、食味に影響を及ぼす程ではなかった（表2、3）。

今後の方針

後期重点摘果やかん水技術と組み合わせた高品質栽培技術について検討する。

宗田 健二（農産園芸部、前淡路農業部）
（問い合わせ先 電話：0790-47-2424）

表1 試験区の構成（窒素成分 kg/10a）

試験区	春 肥		夏 肥		秋 肥	計
	3月下旬	5月下旬	6月下旬	11月上旬		
5月施肥区	6	8	—	6	20	
6月施肥区	6	—	8	6	20	
慣行区	10	—	—	10	20	

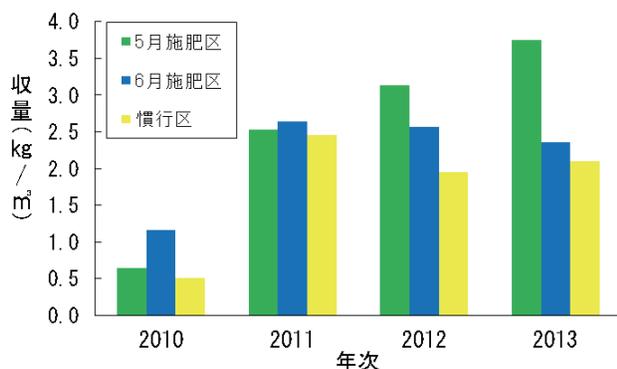


図 夏肥施用と樹冠容積当たりの年次別収量
※夏肥は2011年から施用

表2 夏肥施用と着色期（2011-2013年）

試験区	着色始期	完着期
5月施肥区	10月14日	11月11日
6月施肥区	10月14日	11月12日
慣行区	10月14日	11月12日

注) 着色始期：果皮の緑色の抜けが1割に達した日
完着期：樹全体の果実が完全に着色した日

表3 夏肥施用と果実品質（2011-2013年）

試験区	浮皮程度	糖度 (Brix)	酸含量 (%)
5月施肥区	0.4	10.2	0.77
6月施肥区	0.3	10.3	0.84
慣行区	0.4	10.2	0.75

注) 浮皮程度は無(0)、軽(1)、中(2)、甚(3)の4段階評価の平均値